ACT.01

桶川だって、できるじゃん。



DATTEの文字を手でつくる実行委員会の皆さん。
左から、D：氣賀澤（きがさわ）さん、A：加藤さん（弟）、T：加藤さん（兄）、T：二科（にしな）さん、E：赤堀さん。

「桶川って何にもないよね」

そんな言葉に、真正面から向き合ってみた桶川の人たちがいる。

「桶川だって、やれるさ」

「ここだって、できるじゃん」

地元でお店を営むメンバーたちのそんな思いから始まったのが、「だって実行委員会」。その名のとおり、マルシェの名前も「だって」だ。

メンバーの一人が、ほかの地域のイベントに出店していたころのこと。桶川には、商品を並べて売るだけではない、面白いマルシェがない。そんな「もったいない」という思いを、仲間たちに話してみた。

「じゃあ、自分たちでやってみる？」

「だって、もったいないじゃん。」

仲間との会話から、2023年に始まったマルシェ。やりたいことをカタチにするには、自分たちで動くしかなかった。自ら資金を出し合い、10店ほどで手探りのスタート。それでも、予想以上の人出に手応えを感じた。ボランティアの協力も得ながら回を重ね、今年で6回目。



◀ボランティアへのお礼「だってクーポン」

脱線するほど面白くなる

9月30日、開催を間近に控えた最終ミーティングにお邪魔した。消防署や保健所への書類、スタッフの配置、出店者の並び……。準備の確認をしているはずが、話題はあちこちへ飛んでいく。

「質問に対して脱線ばかりの回答でしたが（笑）」

後日、メンバーがインスタグラムに投稿してくれた言葉だ。確かに、話はマルシェから地元の特産品、イベントの場所、そして次にやってみたいことへ。けれど、その脱線こそが、この人たちらしい。

彼らにとって、マルシェはゴールではない。

実際、2024年には「田んぼだって」というイベントも開催している。新米が穫れた田んぼにテントを立て、新米おにぎりや新米だんごを振る舞うというもの。会場には駐車場もトイレもない。強風でテントが飛ばされそうになる一幕もあったとか。



ここで穫れたお米をここで食べる
究極の地産地消「田んぼだって」

なぜ、わざわざ田んぼで？
ただ面白そうだから。やってみたかったから。
そんな声が聞こえてきそうだ。
2025年の「第5回だって」では、全体テーマに「メキシコの死者の日」を設定。出店者も一緒になってブースや会場を飾り付け、フォトスポットを設け、本場の生演奏も取り入れた。
田んぼも、メキシコも。思いついたことを、仲間と一緒にカタチにしてみる。そこには、仕事とはひと味違う、大人の遊び心がある。
「大変だけど、楽しい」
「私たちの遊びにみんなを巻き込んでいるみたいな感じ」


2025年の「第5回だって」

Photo by Kyoko Sato








2026年の「第6回だって」

もちろん、イベントを続けるのは簡単ではない。準備の負担もあるし、場所や人手の悩みも尽きない。それでも、自分たちがいいと思う店を選び、もっと多くの人に知ってもらおうとする。自分の店だけでなく、仲間の店、桶川の店にも目を向ける。

6回目の「初めて」

そして10月10日、「第6回だって」が開かれた。今回、新たに挑戦したのが「キッズマルシェ」だ。こどもたちが自分で品物を用意し、値段を決め、お店を開く。手作りの品を売ったり、ゲームをしたり。いつもは買い物をする側のこどもたちが、この日はお店の主役になる。



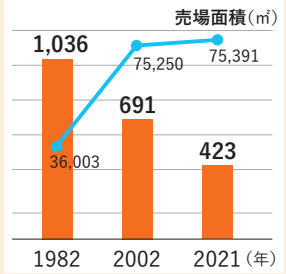
会場には、こどもたちが一生懸命準備したお店がいくつも並んだ。ちょっと緊張した表情、元気な呼び込みの声、品物を手に取るお客さんとのやりとり。そして、思わずこぼれる笑顔。初めての挑戦を、周りの大人たちも温かく見守っていた。
売上だけが目的ではない。「やってみた」「できた」「楽しかった」。そんな経験を大切にしたいという思いが、この企画には込められている。



会場には、市役所職員も出店者の一員として参加。「桶川市だって、ふるさと納税。」と題したPRブースを出した。行政もまた、「だって」の輪に加わった一日だった。
「だって、何にもないよね」を、「だって、こんなこともできるじゃん」に。
その言葉の先にあるのは、マルシェだけではない。田んぼでおにぎりを食べることも、こどもがお店を開くことも、まだ誰もやっていない何かを試すことも。
「だって」の後ろには、前を向く言葉をつなげられる。
さて、次は何をやろうか。
この人たちの次の「だって」が、ちょっと楽しみなのだ。



市内の商店数



出典：桶川市統計書

地元のお店が減っている？

市内では、1980年代前半をピークに商店数が減少傾向にあります。一方で合計売場面積は増加しており、ショッピングセンターやチェーン店進出などによる店舗の大型化が進行。マルシェは、地域に根ざした個店の魅力に気軽に触れられる機会となっています。

ACT.02

またやってよ、に応えたい。



旧南小の盆踊りは、毎年8月16・17日に開催されていた。人口が急増し、町から市になる1970年の一枚。
左ページ上の1980年代、1990年代にかけても、桶川市の人口は増加を続けていた。

大勢の人が輪になって踊る。1970年8月の旧桶川南小学校（以下「旧南小」）の写真には、かつての桶川の夏を彩った盆踊り大会のにぎわいが写っている。

時代とともに姿を消していた夏の風物詩が、この夏、旧南小跡地のことぶき広場に戻ってきた。桶川駅通り商店会（以下「商店会」）を中心に、企業や個人の協賛、近隣町会など多くの人々が力を合わせて実現した盆踊り大会。その背景には、まちに人が集まる場をつくりたいという思いがあった。

駅前にもう一度にぎわいを

かつては、7月の桶川祇園祭と並んで夏のまちを盛り上げていた旧南小の盆踊り大会。昔を知る人たちの記憶には、露店がいくつも並び、多くの人々が集まる光景が今も残っている。盆踊りがなくなった後には、ビアフェスティバルを何度か開催。

一方、近年の駅周辺では、祇園祭が終わると夏に大きなイベントが開かれることはなくなっていた。「昔みたいにまたやってよ」。広場を行き交う人から、そんな声が聞かれることもあった。

そこで、商店会を中心に、改めて人が集まるイベントを企画することに。話し合いを重ねるなかで浮かび上がったのが、「盆踊り大会の復活」というアイデアだった。

それぞれの力を持ち寄って

開催までの準備期間は約半年。商店会の盆踊り実行委員会で、会場の準備を進めた。会場レイアウト、やぐらや看板の大工仕事、電気工事や照明、音響には専門技術を持つ人たちが協力。

ダンスチームや中学の吹奏楽部、太鼓の演奏者なども加わり、出店は地元の飲食店が並ぶなど、踊りが始まる前の時間も思い思いに楽しめる催しとなった。

初日の8月29日はあいにくの雨模様だったが、設営を終えていたので開催を決断。夕方には雨がやみ、待っていたように少しずつ人が集まり始める。

「こんなに人が来てくれるとは思わなかった。いろんな年代の人が楽しそうに踊っている。やってよかったと思いました」


盆踊りが始まると自然と広がる踊りの輪

変わるもの、変わらないもの。



桶川市民踊（みんよう）同好会会長
小池 司尚（もりひさ）さん

盆踊りの話を聞きました

やぐらの上で、軽やかに踊る粋な姿。久しぶりに駅前に戻ってきた盆踊りの輪を、長年、桶川で踊り続けている小池さんは、どんな思いで見つめていたのでしょうか。

昭和の終わりに桶川へ移り住んだ小池さんは、地域の盆踊りに通ううちに誘われ、平成5年ごろから民踊の活動に加わりました。かつて桶川市民踊同好会には、150人ほどの会員がいたといいますが、現在は40人弱。コロナ禍を経て、地域で続いていた盆踊りが、いくつも姿を消しました。それでも、踊りの楽しさは変わりません。小池さんが大切にしているのは、踊りを披露することだけではなく、踊り始めに輪の先頭に立ち、見よう見まねで踊る人たちを迎え入れること。音頭を取る人がいるから、初めての人も輪に加われます。

最近は、若い人たちが楽しめるリズムのある「ボンダンス」も広がっています。

「若い人も踊りやすいダンスを入れて、昔からの踊りと半々ぐらいでやれたらいいのかな」

新しい踊りも、炭坑節や桶川音頭、紅花音頭といったおなじみの曲も。世代を超えて楽しめる盆踊りになってほしいと願っています。

「また開催されれば、私たちも協力したいね」

戻ってきた踊りの輪を、これからも途切れさせないために。小池さんは、次の夏もまた、やぐらの上に立つつもりです。

1980年代





1990年代





商店街でおもちゃ店を営む、実行委員長の田中さん。特に心地よい夜風に恵まれた二日目の30日は予想以上に人出があり、あの頃を思わせるにぎわいが生まれたことを目を細めて振り返る。

終了後、片付けを終えて飲食店で食事をしていた田中さんたちの隣で、浴衣姿の母娘が「めちゃくちゃ楽しかったね」と話していた。思わず自らが主催者だったことを伝えると、感謝の言葉が返ってきた。

「わざわざ親子で浴衣を着て来てくれたんだなって。それがすごくうれしかったですよね」

準備に奔走した人たちにとって、楽しんでもらえたことを実感するひとときとなった。

一度きりで終わらせたくない

もちろん、イベントを続けていくには、費用も人手も必要だ。今回も予想以上に設営費などがかかり、負担は小さくない。この盆踊りを誰が中心となって、どう次の世代へ引き継いでいくかも課題だ。

それでも、広場に人が集まり、世代を超えて同じ場所で同じ時間を楽しむ光景には、何にも代えがたい価値がある。

モノクロ写真に写る踊りの輪から、さまざまな時代を経て、今年の夏に生まれた新しい踊りの輪。時代も顔ぶれも変わっていく。それでも、まちなかに人が集まるきっかけをつくりたいという思いは、今も変わらない。

2026年





















盆踊り実行委員長の田中さん

ACT.03

まちの中で、育っていく。



数人ずつのチームになって、玄関にカボチャの目印が掲げられた家を訪問するハロウィンパレード。
迎える家の人々や、付き添うパパママたち。まちのさまざまな世代が一緒に楽しんでいる様子が印象的だった。

わが子にもあの風景を

夏休みの朝、眠い目をこすりながら向かったラジオ体操の会場。そこには友達だけでなく、近所のおばさんやおじいちゃんもいて、みんなで一緒に体を動かした。そんな何気ない夏の風景が、初田さんの心に残っている。鴨川一丁目で過ごしたこども時代の記憶だ。

北一丁目に家を構え、子育てを始めたころ。近所には同世代のこどもたちもいたが、地域には高齢の住民が多く、こどもの姿を見かけることは少なかった。かつて自分が当たり前のように過ごした地域の風景とは違う。初田さんは、そこにどこか寂しさを感じていた。

「近所の人と顔を合わせながら育つ経験を、自分のこどもにもさせてあげたい」

そんな思いから、近所のパパママたちに声をかけた。活動を始めるにあたり、こども会のような組織をつくることも考えたが、地域活動をよく知る当時の町会役員から、組織にすると役員や当番の負担が生まれ、決められた仕事をこなすことが中心になりかねないと助言された。

そうして生まれたのが、有志グループ「ノースワン」。決まった役割を引き受けるのではなく、まずは自分たちが面白いと思うことから始めてみた。

2022年10月、最初に手探りで始めたのが、近所の家族との小さなハロウィンパレード。翌年2月に企画したのが、北一丁目の桶川消防署を訪ねる見学ツアーだった。町内の掲示板にチラシを貼って参加者を募集。こどもたちに、地域で働く消防士の姿を知ってもらい、いつかはこのまちから消防士になるこどもが出たらいいな。夢は広がる。

ノースワンの始まりにあったのは、特別な計画ではない。自分のこどもたちに、地域でできる様々な経験をしてほしい、という思い。

そして、その思いを近所の人たちとカタチにしていくことだった。



北一丁目の国道17号沿いにある桶川消防署見学ツアー

自分たちで始めて地域と一緒に続けていく

ハロウィンパレードは、回を重ねるごとに参加者が増えてきた。北一丁目の子育てファミリーを中心としたノースワンのグループLINEは、登録者が50人以上に。活動を続けていくには、ノースワンの思いだけでなく、地域の理解が必要だ。

10月16日金曜夜。メンバーたちは、今年のハロウィンパレードを前に、北一丁目町会役員会に初めて出席。自分たちの思いやこれまでの取り組み、ハロウィンの計画について説明した。こどもたちが地域の人と出会い、暮らしているまちに親しみを持てるように、どんな活動をしていきたいのか、資料を添えて伝えた。





すると、役員たちからは理解とともに具体的な質問が続く。

ハロウィンで道路を歩く際の安全はどう確保するのか。プレゼントするお菓子の食物アレルギーにはどう対応するのか。

参加者が増えても、こどもたちに楽しんでもらうためには、事前の準備が欠かせない。メンバーは、保護者の付き添いや誘導体制、参加人数の管理などを丁寧に説明した。町会には、長年にわたって地域の行事を支えてきた経験がある。新しい活動を始める側と、地域を支えてきた側。それぞれの立場から、必要なことを確かめていく。最終的に役員たちからは、当日の交通誘導への協力とともに、今後の活動への期待が語られた。

世代を超えた広がりへ

生まれも育ちも桶川という人も、県外から移り住んだ人も。個性豊かなパパたちを中心に、こどもたちのために知恵と力を出し合っているノースワン。

ことし社会人になったひなたさんは、大学生の頃から参加している。大学で地域活動を学び、自宅をハロウィン訪問先としてこどもたちを迎えたことがきっかけだった。イベントでは、参加者への説明や司会進行などを担う。最初から、たくさんの人が集まっていたわけではない。一つの活動があり、そこに人が加わり、次の活動につながる。ノースワンの輪は、そんなふうに、少しずつ広がっている。



▲ ノースワンの皆さん。左から初田さん、佐藤さん、ひなたさん、市川さん、五十嵐さん。





まちも、人も、変わっていく。



北一丁目町会会長
岩﨑 伸二さん

北一丁目の話を聞きました

北一丁目は、住む人とともに姿を変えてきました。昭和の中頃には、いまは市外へ移転した三井精機の社宅群がありました。その後、昭和の後半にかけて建て替わった頃に住み始めた人々―私もそうですが、今シニア世代になっています。そして平成の終わりから令和にかけて、また建て替わり、若い子育てファミリーが入ってくるようになりました。ノースワンのメンバーも、そうした世代です。

私が北一丁目に住み始めた頃は、仕事中心の生活でした。こども会などの活動はありましたが、私自身が地域に深く関わってきたわけではありません。当時は、こどものことは母親たちが中心になって担う場面が多かったように思います。

今のお父さんたちは、仕事をしながら子育てや家事もして、学校行事にも参加する。いやあ、すごいなと思いますね。私にはなかなかできなかったことです（笑）。

町内には現在、75歳以上の方が360人、81歳以上の方が160人ほど暮らしています。町会も役員の高齢化や担い手不足といった課題を抱えています。そんななか、若い人たちが自分たちの発想で地域の活動を始め、多世代の交流を考えてくれるのは、ありがたいことです。

ノースワンのように、こどもたちをきっかけに地域を盛り上げようとする動きは、町会にとっても心強い。町会がすべてを仕切るのではなく、やってみたいという人たちを応援する。そういう関わり方があってもいいと思っています。

まちも、人も、時代とともに変わっていく。その時代に合った北一丁目のあり方を、これからもみんなでつくっていけたらいいですね。

今日の小さな出会いが いつかこのまちの記憶になる

10月31日土曜、ハロウィンパレード当日。北一丁目の中心に建つ勤労福祉会館には、受付時間午後3時の1時間も前から、思い思いの仮装をした〝キタイチキッズ〟たちが集まり始めた。そして、保護者たち、キッズを家で迎える皆さん、交通誘導する町会役員、ノースワン。みんな北一丁目の人々だ。

まだ明るい午後4時頃から、6チームに分かれて町内12軒を訪問スタート。おばあさんやおじさん、おねえさんなど、まちの皆さんとの交流を楽しみ、約1時間後、達成感に満ちた笑顔で帰還した。ほっとした表情のメンバーから、「来年は夕暮れ時もいいね」などと話す声が聞こえた。

ノースワンの活動が、これからも同じように続くとは限らない。担い手の暮らしも変わるし、こどもたちも成長していく。だからこそ、今できることを考え、試してみる。それが、これからどんなカタチになっていくのか。誰にもわからないからこそ、面白い。

今日の小さな出会いが、いつかこどもたちの思い出になる。近所に顔見知りの大人がいて、知っている場所がある。大きくなったとき、あの日にもらったお菓子や、目の前に現れた大きな消防車のことを、懐かしそうに誰かに話す日が来るかもしれない。そんな記憶もまた、このまちの風景になっていく。











このまちの、好きなところ。

お気に入りのお店がある。誰かと笑い合える場所がある。毎年楽しみな行事がある。
そんな当たり前の風景も、誰かの『やってみよう』から生まれているのかもしれません。
あなたにとって、桶川のまちのどんなところが好きですか？

- □ 季節を感じる風景
- □ つい誰かに教えたくなるお店
- □ 顔なじみとの何気ない会話
- □ みんなで楽しむお祭りや行事
- □ こどもたちの笑い声
- □ いつもの暮らしの心地よさ
- □ その他：

桶川のいいところ、年賀状にしました。

＼20-21ページに中綴じしています／



特集はいかがでしたか？
このまちの何よりの宝は、市民の皆様の チカラです。
海も山もないけれど、いいところがいっぱいの桶川市。
大切な誰かへの新年のごあいさつに、
桶川らしい年賀はがきをご用意しました。
是非ご活用ください。



小野 克典 市長